ラジオからテレビへの転換期におけるメディア編成
―「いけ花講座」番組を中心として―

辻　泰明*

Broadcast media programs in the transition era from radio to television, focusing on the Ikebana course programs

Yasuaki TSUJI

抄録

本研究は、日本でのラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの編成の特徴と変遷を考察することを目的とする。1950年から1965年までの番組確定表を調査し、同時期にラジオとテレビで放送された、いけ花を題材とする趣味講座番組を事例として分析した。その結果、（1）ラジオとテレビは対象視聴者層を同じくしながらも、放送時間帯において棲み分けが図られていたこと、（2）番組内容においては、それぞれの特性に応じた形態に分化した後、統合されたこと、（3）出演者においては、テレビの特性に応じた新たな出演者が登用されたこと、（4）テキストにおいては、ラジオを優先するという差別化がなされていたこと、が明らかになった。ラジオからテレビへの転換期に、いけ花を題材とする趣味講座番組においては、メディア間での棲み分けや差別化が図られながらも、新たなメディアの特性に応じた出演者が現れたといえる。

Abstract

The purpose of this study is to consider the characteristics of broadcast media programs in the transition era from radio to television in Japan. This paper considers the Ikebana course programs as a case study by investigating the fixed program schedule list from 1950 to 1965. The results are as follows: (1) As for the time zone, a habitat segregation was organized. (2) As for the contents, styles according to the characteristics of each media were differentiated and then integrated. (3) As for the lecturers, new comers were assigned in television. (4) As for the textbooks, a differentiation was organized. In the transition era from radio to television, as for the Ikebana course programs, while the habitat segregation and differentiation were organized in some areas, new comers of lecturers according to the characteristic of new media appeared.

＊筑波大学図書館情報メディア系
Faculty of Library, Information and Media Science,
University of Tsukuba

1．はじめに

本研究は、1950年４月３日から1965年４月３日までの番組確定表を元に、同時期にラジオとテレビで放送された趣味講座番組、とりわけ、いけ花を題材とした講座番組を調査することによって、日本でのラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの編成の特徴と変遷について考察することを目的とする。

1.1　研究の背景

2015年２月から３月にかけてNHK放送文化研究所がおこなった調査[1)]で、テレビの視聴時間が1985年以降で初めて「短時間化」する一方、インターネットを欠かせないメディアとする人が増え続ける[2)]など、テレビからインターネットへのメディア転換が進行している。こうしたメディアの転換は半世紀ほど前にも生じていた。1953年のテレビ放送開始から10年ほどの間に起きたラジオからテレビへの転換である。

日本におけるラジオ放送は、戦後復興と共に隆盛を極め、「昭和28年から30年にかけては、いわばラジオの全盛時代」[3)]となった。1957年初頭には、ラジオ受信者は1450万[4)]を超え、1958年には普及率81.3％と最高[5)]に達する。

一方、日本におけるテレビの本放送は1953年２月１日に始まった。草創期における「テレビの普及率（世帯あたり）は僅か0.3％で、受信機の所有者といえばほとんどラジオだけの所有者を意味していたほど」[6)]だった。ところが、その後、テレビは、1959年の皇太子ご結婚特別放送などを経て急速に普及し、1963年12月末には受信契約数が1500万を突破、「世帯普及率は73.4％となり、受信機の絶対数ではアメリカについで世界第２位」[7)]という「驚くべき普及」[8)]を示すに至った。

その結果、日本におけるラジオとテレビの地位はどのように変化したか。図１は、1954年度から1964年度にかけての時期における、ラジオ第一放送の夜間平均聴取率とテレビ普及率の変化を一つにまとめた結果である。

図１に明らかなとおり、テレビは1959年頃を境として急激に普及の度を強め、1964年度には普及率が70％を超えるに至っている。一方、ラジオ第一放送の聴取率はこの期間、一貫して下がり続け、1954年度には25％近くあったものが、1964年度には１％近くにまで下がっている。

1964年には、「人びとのテレビ視聴がすでにラジオ聴取にとってかわり、かつてのラジオ全盛時代に比肩するほどのテレビ接触が行なわれていることは明らか」[10)]となった。

新しいメディアが生まれた時、そこには、コンテンツが必要となる。前述のようなラジオからテレビへの転換の時期において、テレビは、映画およびラジオという先行するメディアにコンテンツの供給を求めた。

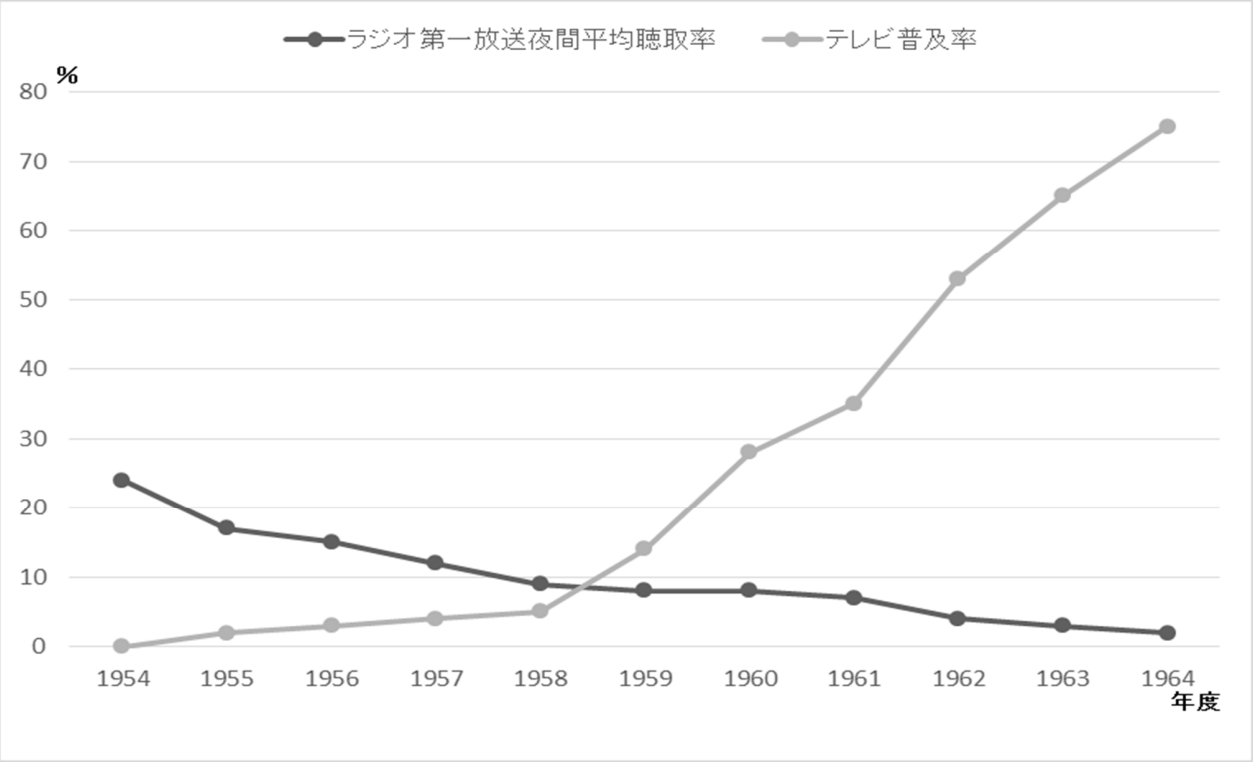


図１　ラジオ聴取率とテレビ普及の相関[9)]

映画からテレビへのコンテンツ供給においては、日本の映画会社がテレビを脅威とみなして提供禁止の申し合わせがなされた。その結果、コンテンツ不足に陥った日本のテレビには、アメリカ製テレビ映画が大量に流入した[11]ことが知られている。

一方、ラジオからテレビへのコンテンツ供給ではどうだったか。日本でテレビが始まった当時、公共放送は既に30年近くに渡ってラジオ放送を続けており、多くのコンテンツを有していた。そこでは、ラジオとテレビ双方で、同じコンテンツが放送されることになった。

その一つに、いけ花を題材とした講座番組が挙げられる。

講座番組とは、ラジオ放送の開始直後から編成されたコンテンツで、東京放送局開局２年目である1926年度の項目別比率は、講演講座33.5％、報道27％、音楽16.7％、演芸14.9％、その他6.2％となっており[12]、講座は講演と合わせてではあるが最も大きな比率を占めていた。講座番組には、大別して語学講座、大学・高校講座などの学習講座番組と趣味講座番組の２種類がある[13]が、後者は一般大衆への啓蒙と実用的知識技能の伝播を目的として、昭和期においてはほぼ一貫してラジオ第一放送や総合テレビといった総合波で編成された。そして、昭和期のほとんどの期間において、その対象とする主な聴取者・視聴者層は家庭にいる女性だった。

1960年におこなわれた国民生活時間調査[14]では、「家庭婦人の場合には、正午からの一時間だけでなく、午前九時から午後五時ごろまでの昼間の時間には、他に比べて、ラジオをきいている人が多い」[15]という結果が得られ、この時点のラジオにおいては、特に日中の時間帯で家庭にいる女性が主な聴取者だった。

一方、1964年夏にNHK放送文化研究所が実施した調査では、家庭にいる女性の１日あたり平均テレビ視聴時間は３時間９分に及んでいた[16]。さらに、1965年におこなわれた国民生活時間調査[17]では、「家庭婦人の場合、テレビをみる時間は他の職業の人に比べてかなり多かった」[18]という結果が得られている。テレビ普及期の主要な視聴層は、家庭にいる女性であり「テレビの最大の“おとくいさま”」[19]と評された。

この「家庭にいる女性」向けの趣味講座番組において、ごく初期から盛んに取り上げられた題材が、いけ花である。いけ花を題材とした講座番組の放送枠（定曜定時に編成され、定められた形式と分野の中でさまざまな題材が取り上げられる「枠」としての番組）は、昭和戦前期および戦中期（1925年のラジオ放送開始から1945年８月まで）のラジオでは、主に「家庭講座」であり、1942年度までは、毎年度、いけ花を題材とした講座番組が編成され、「電波によるいけばなの大衆化に果した役割は大きい」[20]と評された。戦前および戦中期のラジオにおける、いけ花を題材とした講座番組の特徴は、次の３点に集約できる。

1．「誰にでも出来る」、「どなたにも活けられる」、「新たに入門する人の爲めに」などの副題に示されたような入門講座と、「一月のいけばな」、「夏の生活と生花」、「秋草の盛花」などの副題に示されたような季節性の強い講座とが併存していた[21]こと
2．新興の近代流派、特に草月流を紹介する役割を果した[22]こと
3．映像が無いというラジオの特性を補うため、当初よりテキストが発刊された[23]こと

1925年度から1945年度までの期間における、ラジオにおけるいけ花を題材とした講座番組の放送回数は、総計111回におよぶ[24]。

戦局が悪化した後、および戦後の混乱期においては、いけ花を題材とした講座番組は本格的に編成されることはなかった[25]が、1950年度になってようやく本格的な趣味講座番組である「女性教室」（1950－1952年度はラジオ第二放送、1953年度－1964年度はラジオ第一放送）が新設され、戦後のラジオにおける、いけ花を題材とした講座番組の放送枠が設けられることとなった。

一方、テレビでは1953年の放送開始以降、1959年度までは「ホーム・ライブラリー」（総合テレビ）、それ以降は「婦人百科」（総合テレビ）が、その放送枠となった。いけ花は毎年度、これらの放送枠の題材として採り上げられて複数回に及ぶシリーズが組まれ、1964年度には、いけ花だけを題材とした独立の放送枠としての番組（「季節のいけばな」）が総合テレビにおいて通年で設けられた。この間、1959年には教育テレビが開局したが、いけ花を題材とした講座番組を移設する動きはなかった。教育テレビは「昼間には学校向けおよび教師・母親向けの番組」を編成（当初の放送開始時刻は午前11時）した[26]が、いけ花を題材とする講座番組は、教育番組ではなく教養番組と位置づけられており、教育テレビの対象ではなかったからである。

いけ花を題材とする講座番組は、前述のとおり、昭和期の大半を通じて、ラジオでは第一放送（戦時下や戦後の混乱期では一時的に第二放送で編成されたことがある）、テレビでは総合テレビで編成され、昭和期の女性向け趣味実用講座における中核的な存在だったといえ

る。

このようにいけ花が題材として盛んにとりあげられたのは、この間を通じて、いけ花が女性層にとっての代表的な趣味だったからと考えられる。特に戦後復興期以降は、「女芸や花嫁道具としてではない。解放された日本の女性の地位は向上し、余暇の利用が広まり、いけばなを上品な趣味として」[27]楽しむ風潮が広まった。

昭和戦後期におけるいけ花について、1953年に発刊された雑誌『中央公論』には、流派の数が「全國三千と稱される」とした記事が掲載[28]されており、雑誌『週刊朝日』1966年12月23日号には「華道の流派、なんと三千流。いけばなをたしなむ“華道人口”一千万人」という記述[29]がある。また、雑誌『朝日ジャーナル』1962年６月10日号には、「いわゆる前衛いけばな」だけで、「五百万」の人口があるという記述[30]がある。さらに、これは後の時期の記述だが、1971年に発刊された『図説　いけばな大系　第４巻　現代のいけばな』において、工藤昌伸は「俗にいわれる流派の数は三千とも言い、またおそらく実数はその半分くらいであろうともいわれている」[31]と記した後、いけばなを習っている人の数を「おそらく千五百万近く」[32]と推計している。

これらの記述によれば、いけ花は、昭和戦後期を通じ、女性の実用的な趣味における主要な勢力であり続けたといえるだろう。

図２は、1950年度から1964年度にかけての公共放送における、いけ花を題材とした講座番組のラジオおよびテレビでの放送回数の推移である。

1950年度から1964年度までの間に、ラジオでは113回、テレビでは172回、いけ花を題材とした講座番組が放送された。この期間におけるラジオでの放送は間歇的ではあるが、ラジオとテレビ双方で放送がある年度では、最後の年度を除き、ラジオでの放送回数がテレビでのそれを上回っている。

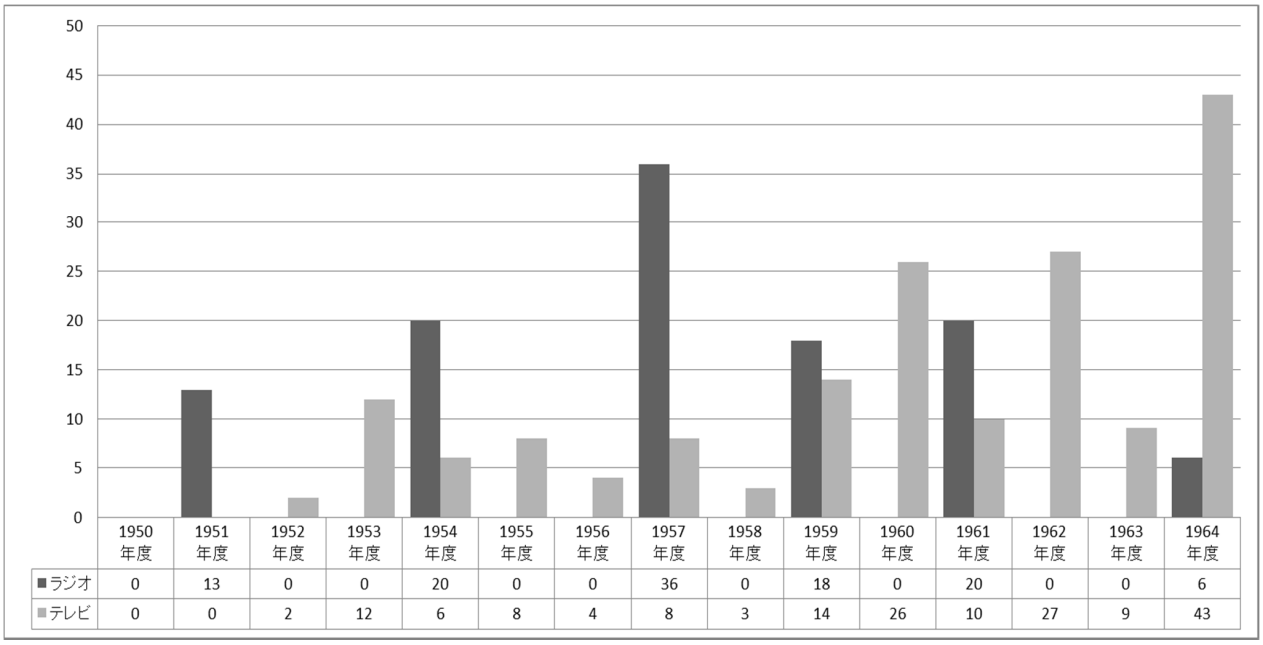
期間中の中期にあたる1957年度には、「機構改革でラジオ、テレビの制作部門が一体化された」結果、「ラジオ、テレビの企劃実施が１つの機構の中で、協力して、それぞれのミディア（原文ママ）の特質を生かした企劃内容の婦人番組を放送する体制」[33]となった。また、1961年度の編成の記録には、「基本的な考え方としては、ラジオ、テレビそれぞれのもつ機能的な特性を生かして番組を制作し、編成する」[34]と記されている。

これらのことから、ラジオからテレビへの転換期において、いけ花を題材とする講座番組では、旧メディアであるラジオと新メディアであるテレビの間で、両者の特性に応じた編成上の措置が図られていたと想定できる。

1.2　先行研究

ラジオからテレビへの転換が生じた時期の放送メディアに関して、視聴率や普及率といった統計を元に論じた研究はあるものの、編成や番組に関しての研究は少なく、メディアごとの特性に応じた分析となると、ほとんどなされていない。

日本放送協会放送文化研究所による「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の３」（『放送学研究10』日本放送出版協会、1965）の一項「番組視聴の諸相 a.『ラ



	1950年度	1951年度	1952年度	1953年度	1954年度	1955年度	1956年度	1957年度	1958年度	1959年度	1960年度	1961年度	1962年度	1963年度	1964年度
■ラジオ	0	13	0	0	20	0	0	36	0	18	0	20	0	0	6
■テレビ	0	0	2	12	6	8	4	8	3	14	26	10	27	9	43

図２　ラジオおよびテレビにおける年度ごと講座数の推移（1950年度～1964年度）

ジオ志向』から『テレビ志向』へ」は、最も早い時期におけるラジオからテレビへの転換の研究であるが、その考察は、ラジオ聴取率、テレビ普及率、テレビ視聴時間量などによる統計的な分析が主であり、編成や番組における転換の実態を詳細に研究したものではない。

テレビの急速な普及に伴うラジオの衰退を論じ、編成や番組にまで言及した考察は、田村穣生「ラジオ聴取の変容とその将来」(『NHK放送文化研究年報　―第12集―』日本放送協会、1967）があるが、専らラジオについて考察したものであって、ラジオとテレビ両者を俯瞰して分析したものとはいえない。

また、聴視者に視点を設定してラジオからテレビへの転換を論じた研究には、吉田潤「ラジオのきかれ方とテレビのみられ方　――37年7月の聴視率調査の結果を中心に――」(『文研月報　昭和38年3・4月号』日本放送出版協会、1963.）や中西尚道「ラジオ・テレビ聴視者の生活時間構造　――生活時間の階層別分析とテレビの設置による変化――」(『NHK放送文化研究所年報　―第9集―』日本放送協会、1964）があるが、生活時間の変化を追った論考であって、番組や編成といったメディアの内容に触れた研究ではない。

その他、ラジオからテレビへの転換に言及した研究には、堀明子「ラジオ嗜好とテレビ嗜好」(『NHK放送文化研究所年報　―第8集―』日本放送協会、1963）や石井研士「戦後のラジオでの宗教放送とテレビ放送への移行」(『國學院大學紀要　第四十一巻』、國學院大學、2003）がある。

前者は受け手である聴視者の嗜好調査に基づく論考であり、「男子は、スポーツ、娯楽的種目を好むのに対し、女子は、文化的、社会的教養、婦人向け、日本芸能等を好んでいる人が多い」[35]と分析した上で、「聴視者は、嗜好の次元では、ラジオとテレビとを明確には分離していない」[36]と結論づけている一方、「新しい種目分類や新しい属性分類がなされた時は、結果が異なるかもしれない」[37]という課題を残しており、送り手である放送局の側でどのような編成がなされていたのかという実態を論じたものではない。

また、後者はテレビで宗教放送がおこなわれる前の時期までの戦後ラジオにおける宗教放送の分析を主としており、テレビとラジオを並列的に比較して論じたものではない。

以上のように、ラジオからテレビへの転換期における編成の実態について、1次資料に基づく詳細な研究はなされていないのが現状である。

1.3　研究の目的

本研究の目的は、ラジオからテレビへの転換期において、メディアごとの編成の特徴と変遷を、いけ花を題材とする講座番組を事例として、調査し、考察することである。ラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの編成について、その具体的な事例を調査し、実態を明らかにすることは、放送メディアの歴史を研究する上で意義がある。また、テレビからインターネットへという新たなメディアの転換が生起しつつある現在の状況に対しての示唆も得られると思われる。

1.4　研究の方法

本研究の研究方法は文献調査による考証である。

調査の対象は、1950年4月3日から1965年4月3日までの「NHK番組確定表[38]」に記載された、いけ花を題材とする講座番組である。

調査対象期間の始まりを1950年4月3日としたのは、この日が戦後のラジオにおける本格的な女性向け講座番組である「女性教室」の放送開始日だからである。終わりを1965年4月3日としたのは、この日がその「女性教室」の終了日（最終放送日）にあたるからである。本研究においては、今回の調査期間である1950年4月3日から1965年4月3日までを「ラジオからテレビへの転換期」と称する。

なお、この時期の公共放送において、いけ花を題材とする講座番組が定期的に編成された放送枠は、前述のとおり、ラジオでは「女性教室」、テレビでは「ホーム・ライブラリー」、「婦人百科」、「季節のいけばな」であった。そのため、本研究では原則として上記四つの放送枠を調査の対象とする。また、この時期のラジオまたはテレビにおける、いけ花を題材とする講座番組を「いけ花講座」と称する場合がある。

本研究における調査の対象は、公共放送のラジオおよびテレビに限るものとする。1953年以降、民間放送では、日本テレビ（1953年）、ラジオ東京（1955年）、大阪テレビ放送および中部日本放送（共に1956年）などが次々に開局したが、このうち日本テレビはラジオ放送を行なっていない。また、他の局もラジオ放送の開始がテレビ放送開始の2年足らず前にすぎないことから、「各社は正直なところラジオの経営に精一杯で、テレビにまでは手が回らないというのが実情であった」[39]。したがって、ラジオからテレビへのコンテンツ供給が生じる状況には無かったと考えられるからである。

以下、まず、「NHK番組確定表」（以下、番組確定表と略する）の調査に基づいて、ラジオからテレビへの転

換期における「いけ花講座」の一覧表を作成し、放送の実態を明らかにする。

その上で、一覧表に示された放送実績を分析し、（1）放送時間帯、（2）番組の内容、（3）出演者、（4）テキストという四つの観点から考察をおこなう。

2．調査結果

本章では、番組確定表に基づいておこなった調査について、その結果を記す。なお、表1、表2共に、同一の放送枠であっても、放送時間帯が移設されている場合には、放送枠の横に新たな放送時間帯を記した。

まず、1950年4月3日から1965年4月3日までの期間におけるラジオでの「いけ花講座」の一覧を表1に示す。

表1　ラジオからテレビへの転換期におけるラジオ「いけ花講座」一覧

（放送枠）（放送時間帯） 放送年月日	内容（講座名）	出演者（講師）	性別	講座回数	テキスト
（女性教室）（午前10時30分－11時）					
1951年8月2日～30日	花のこころ	勅使河原蒼風	男	13	無
（1952～4年は放送無し）					
（女性教室）（午後2時45分－3時）					
1955年 1月4日～1月31日	暮しを豊かにするいけ花　生花入門	勅使河原蒼風	男	20	有
（1956年は放送無し）					
1957年 4月1日～4月12日	いけばな―いけばなについて	小原豊雲	男	10	有
4月15日～4月30日	いけばな　池坊いけばなについて 池坊いけばなの基本	池坊専永 石山文恵	男 女	1 10	有
1958年 1月6日～1月24日	生花と室内装飾	勅使河原蒼風 勅使河原霞	男 女	13 2	有
（1959年は放送無し）					
（女性教室）（午後2時5分－2時20分）					
1960年 1月4日～1月15日	いけばなについて	小原豊雲	男	9	有
1月18日～1月29日	家庭のいけばな	勅使河原和風	男	9	有
（女性教室）（午前9時30分－9時45分）[40]					
1961年 10月2日～10月7日	いけばなと俳句 花をいけるために	池坊専永	男	6	有
10月9日～10月16日	秋の花をいける前に	小原豊雲	男	7	有
10月17日～10月23日	花型の基本	勅使河原和風	男	6	有
10月31日	質問に答えて	勅使河原和風	男	1	有
（1962年～63年は放送無し）					
（女性教室）（午前9時15分－9時45分）					
1964年 12月25日～12月30日	室内装飾　暮らしの中のいけ花	大野典子	女	6	有

次に、同じ期間におけるテレビでの「いけ花講座」の一覧を表２に示す。

表２　ラジオからテレビへの転換期におけるテレビ「いけ花講座」一覧

（放送枠）（放送時間帯） 放送年月日	内容（講座名）	出演者（講師）	性別	講座回数	テキスト
（ホーム・ライブラリー）（午後１時15分－1時30分）					
1953年 ３月26日～27日	テレビ生花教室	小原豊雲	男	2	無
６月17日～19日	六月の生花（水仙・山百合）	安達潮花	男	3	無
７月８日～９日	夏のお花（グラジオラスのいけ方・ダリヤのいけ方）	池田理英	女	2	無
８月５日・７日	夏のお花（１）水盤の花（２）コンポート	藤原幽竹	男	2	無
10月７日	十月の生花	押川如水	女	1	無
11月４日	季節のお花	藤原幽竹	男	1	無
1954年 １月５日	新春の生花	安達潮花	男	1	無
２月８日	春の生花　―梅二題―	押川如水	女	1	無
３月２日	三月の生花　お節句の日に	勅使河原霞[41]	女	1	無
（ホーム・ライブラリー）（午後１時15分－1時35分）					
1954年 ６月３日	季節の生花	小原豊雲	男	1	無
７月２日	七月のお花	藤原幽竹	男	1	無
９月８日	秋のいけ花	未生院翁甫	男	1	無
10月１日	秋のいけ花　―菊―	押川如水	女	1	無
11月12日	季節のいけ花　菊と柿	池田理英	女	1	無
1955年 １月７日	新春のいけ花	臼井桂鳳	未詳	1	無
（ホーム・ライブラリー）（午後１時－1時20分）					
1955年 ５月12日	野の花を生ける	河村万葉庵	男	1	無
７月21日	夏の生花	小立千蓉	未詳	1	無
９月22日	秋草を生ける	勅使河原霞	女	1	無
10月20日	いけばなの歴史（１）	大井ミノブ 藤原幽竹	女 男	1	無
10月21日	いけばなの歴史（２）	大井ミノブ 池田理英	女 女	1	無
11月３日	晩秋のいけ花	長谷川菊洲	男	1	無
12月８日	パーティー用の生花	山中阿屋子 倉持百合子	女 女	1	無
1956年 ３月１日	ひなまつりの生花	安達武子 安達瞳子	女 女	1	無
（ホーム・ライブラリー）（午後０時35分－1時）					
1956年 ４月19日	生活と生花	中山文甫	男	1	無
７月12日	部屋を涼しくする生花	大槻秀楓	未詳	1	無
12月13日	きょうも美しく「クリスマスと正月の生花」	勅使河原霞	女	1	無
1957年 ３月28日	きょうも美しく　「春の花を活ける」	山中阿屋子	女	1	無
４月５日・12日	いけばな（１）「季節の花をいける」 メモ「お花の留め方」 いけばな（２）「和室の花と洋室の花」 メモ「水揚げ」	小原豊雲	男	2	無
４月19日・26日	いけばな（３）「三種いけ」 メモ「材料の整理」 いけばな（４）「いけばなの意匠」 メモ「アクセサリーの花」	池坊専永	男	2	無
５月８日	メモ「庭草を生ける」	山中阿屋子	女	1	無

表２　続き

（放送枠）（放送時間帯） 放送年月日	内容（講座名）	出演者（講師）	性別	講座回数	テキスト
８月22日	きょうも美しく 「涼しい生花」	勅使河原和風	男	1	無
９月20日	女性百科 「秋草をいける」	河村萬葉庵	男	1	無
（ホーム・ライブラリー）（午後０時35分－0時50分）					
1958年 １月13日	初春に花をいける	勅使河原蒼風 持永禎子 勅使河原霞	男 女 女	1	無
10月14日	秋の生花	勅使河原霞 谷井澄子	女 女	1	無
12月25日	新しい年のために（３）「室内装飾」 ―生花―	安達潮花 安達瞳子	女 女	1	無
1959年 １月６日	新春の生花	勅使河原蒼風 持永禎子 勅使河原霞	男 女 女	1	無
（婦人百科）（午後０時20分－0時40分）					
1959年 ７月17日	「真夏のいけ花」	小原豊雲	男	1	無
（婦人百科）（午前10時35分－11時）					
1959年 10月８日～12月31日[42]	「生花」―いけ花の使用用具―他	勅使河原霞 倉持百合子[43]	女 女	13	無
1960年 ４月７日～５月26日[44]	「いけばな」	池田理英	女	8	有
６月２日～30日[45]	「いけばな」	佐藤秀抱	男	5	有
７月７日・22日	「いけばな」	大野典子	女	2	有
９月６日～27日[46]	「いけばな」	勅使河原和風	男	4	有
（婦人百科）（午前10時30分－11時）					
11月22日・29日	「いけばな」	小原豊雲	男	2	有
12月15日・29日	「いけばな」[47]	押川如水	女	2	有
1961年 ３月７日・14日・28日	「いけばな」[48]	安達瞳子	女	3	有
７月14日	「すずしいいけ花」	工藤和彦	男	1	無
９月21日	「秋の花をいける」	大野典子	女	1	無
12月５日～26日[49]	「12月のいけばな」（１）（２） ―お正月の花―（１）（２）	勅使河原霞	女	4	無
1962年 １月９日～30日[50]	「くらしのいけばな」[51]	池坊専永	男	4	無
３月２日	「３月のいけばな」	勅使河原和風	男	1	無
４月２日～６月25日[52]	「いけばな」（１）―花型の構成―　他[53]	勅使河原和風	男	13	無
12月27日	「お正月のいけばな」	池田理英	女	1	無
1963年 １月７日～２月25日[54]	「いけばな」	安達瞳子	女	8	無
３月４日～25日[55]	「いけばな」	中山文甫 中山尚子[56]	男 女	4	無
11月５日～12月31日[57]	「いけばな」	小原豊雲	男	9 （７）[58]	無
（季節のいけばな）（午後２時35分－3時）					
1964年 ４月６日～６月29日[59]	「さくら」 他	勅使河原霞 木戸きみえ	女 女	13	無
７月６日～９月28日[60]	「たなばた」 他	安達瞳子 宮坂花恵 （他[61]）	女 女[62]	11	無
10月５日～12月28日[63]	「花をいけるこころ」 他	池田理英 池田昌弘 （他[64]）	女 男[65]	9	無
1965年 １月４日～３月22日[66]	「迎春花」 他	勅使河原和風	男	10	無

以上、本章では、番組確定表の調査結果について記した。

次章では、本章の調査結果に基づき、ラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの編成の特徴と変遷について考察する。

3．考察

本章では、ラジオからテレビへの転換期における「いけ花講座」についてメディアごとの編成の特徴と変遷を（1）放送時間帯、（2）番組の内容、（3）出演者、（4）テキストという四つの観点から考察する。

3.1　放送時間帯

ラジオの「いけ花講座」とテレビの「いけ花講座」が同じ日に放送されたことがあるのは、1955年1月、1957年4月、1958年1月、1964年12月である。このうち、1955年1月は、ラジオが午後2時台（2時45分から）、テレビが午後1時台（1時15分から）、1957年4月および1958年1月は、ラジオが午後2時台（2時45分から）、テレビが午後0時台（0時35分から）、1964年12月は、ラジオが午前9時台（9時15分から）、テレビが午後2時台（2時35分から）である。いずれも放送時間帯が異なっている。

考察の対象を「いけ花講座」の放送枠全体にまで拡大すると、以下のようになる。なお、時間帯の調査は、各年度の『NHK年鑑』によっておこなった。

まず、ラジオでの「いけ花講座」放送枠である「女性教室」の放送時間帯は、1950年度の放送開始から1953年度途中まで午前中の10時台（10時または10時30分から）、1953年度途中から1959年度まで午後2時台（ほとんど2時45分から、まれに2時5分または2時30分から）、1960年度から1962年度まで午前9時台（9時30分または31分から）、1963年度は午後2時30分から、1964年度（放送終了年度）は午前9時15分から、であった。

次に、テレビでの「いけ花講座」放送枠である「ホーム・ライブラリー」の放送時間帯は、1952年度の放送開始から1958年度の放送終了まで午後0時台または1時台（0時20分または0時35分からと1時または1時15分から）、同じく「婦人百科」は放送を開始した1959年度の9月まで0時台（0時20分から）だったが、1959年10月以降1963年度まで午前10時台（10時30分または35分から）、そして1964年度に放送された「季節のいけばな」は午後2時台（2時35分から）であった。

ラジオとテレビとが併存している1952年度以降で両者の時間帯を比較すると、1952年2月から1953年12月までの10か月ほどは、ラジオ午前、テレビ午後と分かれているが、以降、1959年10月まではラジオ、テレビ共に午後の時間帯に編成されている。1959年10月にテレビで「婦人百科」が新設されて以降は、当初半年ほどはラジオ午後、テレビ午前と分かれていたが、1960年度にラジオの「女性教室」が午前に移設され、以後1962年度までラジオ、テレビ共に午前の時間帯に編成されている。1963年度は、ラジオ午後、テレビ午前と分かれ、1964年度は、ラジオ午前、テレビ午後と分かれている。

ラジオ、テレビ共に午前、あるいは、ラジオ、テレビ共に午後に編成されている場合でも、その放送時間帯は、ラジオ9時台に対しテレビ10時台、ラジオ2時台に対しテレビ0時台または1時台というように、重なることがないように編成されている。

生物学では「生活様式のよく似た二つ以上の個体または種が空間的または時間的に生活の場を異にすること」[67]を棲み分けというが、ラジオからテレビへの転換期における「いけ花講座」の編成にこれを敷衍すれば、ラジオの「いけ花講座」とテレビの「いけ花講座」に関して、家庭にいる女性という同じ視聴者層を対象としながら、その放送時間帯といういわば「生息場所」について、棲み分けが図られていたといえるだろう。

3.2　番組の内容

本研究での調査期間における放送の録音テープやビデオテープなどの記録は確認できないが、それぞれの番組内容はその副題から推し量ることができる。そして、その副題には、ラジオとテレビとで明らかな性格の違いがある。

まず、ラジオでの副題は、「いけばなについて」、「いけばなの基本」、「花型の基本」など、入門講座としての性格をうかがわせるものがほとんどである。1954年度には、ラジオで連続20回という大規模な講座が編成されている。この講座のテキストには、作例に加えて、「いけばなの歩み」、「独習の要領」、「基本的な用語や方法」などの解説が付されており、放送の内容も同様のもの、すなわちいけ花を基礎から体系的に講義するものだったと推定できる。

一方、テレビでの副題には、入門講座の性格を窺わせるものは、1952年度小原豊雲の「テレビ生花教室」、1955年度大井ミノブ他の「いけばなの歴史」、1959年度勅使河原霞「生花」など僅かしかない。

入門講座を特徴とするラジオに対し、テレビは、半数以上の講座の副題に時節が冠せられており、季節に合

わせた作例紹介が多い。たとえば、1954年度のテレビにおける講座は、「新春の生花」、「春の生花」、「三月の生花」などすべて時節を冠した副題が付けられており、基礎からの講義というよりも季節に合わせた作例紹介という内容になっている。テレビでは、他にも「季節のお花」、「季節の生花」、「季節の花をいける」、「ひなまつり」、「クリスマスと正月」など、時節に関するものが多いのに対し、ラジオでは、1961年度の小原豊雲による7回の講座を除いて時節を冠する副題はない[68]。

以上は副題についての分析だが、ラジオとテレビでは連続講座の回数でも明らかな違いがある。ラジオではすべて6回以上の連続講座であるのに対し、テレビでは単発の講座が特にその初期において多い。

昭和戦前・戦中期のラジオにおいて、「いけ花講座」の内容は、入門性と季節性を併せ持っていたが、ラジオからテレビへの転換期における「いけ花講座」の内容は、その初期においては、ラジオは長期入門講座、テレビは時節を冠した単発の作例講座に分化したことになる。

なぜ、こうした分化が生じたのか。それは両者のメディアとしての特性の違いに起因するものであろう。

当時、家庭用のオーディオテープレコーダーやビデオ録画機は普及しておらず、放送は一過性のもので反復学習には向いていなかった。ところが、ラジオでは、映像が無いという欠点を補うために従来からテキストが発刊されていた。テキストがあれば、何度も同じところを読み返すことができるため、反復学習が可能であり、初心者にも追随できる。その結果、ラジオにおいては専ら入門講座が編成されることになったのであろう。また、「女性講座」のテキストは原則として月刊であったため、月単位でテーマを決める必要があった。そのため、放送においても月単位で編成され、いきおい大型の連続講座となったと考えられる。実際にラジオにおける講座は、1964年を除き、すべて1か月を丸ごと費やして放送されている。

一方、テレビでは、この時期、原則としてテキストは発刊されていない。しかし、映像があるため、作例をあらゆる角度から詳細に見せることができる。また、ラジオでの「女性教室」のようにテキストの発刊に束縛されないため、年に1回1か月だけというようなことはなく、毎月のように編成することができる。そこで、季節に応じた旬の題材をとりあげて講師の腕を見せるような作例が披露されることになったのは自然な流れだったといえる。ただし、テキストが無いため、何度も反復して確認することが必要となるような複雑な内容は放送できない。故にテレビでは、単発の季節性を前面に出した内容となったのであろう。

こうしてラジオは大型の入門講座、テレビは単発の季節ものという分化が生じたわけだが、転換期の中頃になると、こうした状況に変化が生じる。連続講座の回数について年を追って分析すると、大型の入門講座が編成されるメディアが次第にラジオからテレビへと移っていくことが確認できるのである。

すなわち、ラジオでは1957年度まではすべて10回以上だったのが、1958年度に0回となった後、1959年度以降はすべて1桁に減少しているのに対し、テレビでは逆に1958年度まではすべて1乃至2回という小規模な講座だったのが、1959年度に初めて連続13回という大規模な連続講座が出現して以降、連続4～5回の中規模講座や連続10回以上の大規模講座が頻出するようになる。

こうしたラジオからテレビへの遷移は1959年度を結節点として生起しているが、そこには何らかの要因が介在しているだろうか。

当時の編成方針を記録した資料には、「テレビの普及にともない、婦人番組でも、ラジオ・テレビの特質を、それぞれ充分に発揮させるよう編成したことはもちろんである。一例をあげると、家庭生活を豊かにする実技の指導は、テレビで綿密に系統だてて取り扱うこととし、10月から婦人番組が増設されたのを機会に、その大部分を家庭実用番組にあて、内容を充実強化した。一方、ラジオの家庭実用番組は、きき易く親しみ易くするために、ディスクジョッキーを取り入れるなど、耳できく実用知識の紹介に重点をおいた。」[69]と記されている。「放送開始以来7年目をむかえたテレビ放送は、（中略）地域的拡大とともに受信者の急増をみ、番組に対する要望もとみにたかまってきた」[70]ため、テレビの編成において「『ホーム・ライブラリー』を廃止し、新たに午後1時20分より20分間『婦人百科』を編成して、婦人聴視者の要望にこたえた」[71]というのである。

こうして1959年度に新設された「婦人百科」においては、10月に勅使河原霞による連続13回というテレビでは空前の規模の「いけ花講座」が編成された。副題によればその内容は、第1回が「いけ花の使用用具」、第2回が「基本花型」、以下「水揚げ法」、「材の橈め方」、「投入れの基本」と続いており、体系的な入門講座の様相を呈している。12月には「クリスマスを飾る花」という季節性を前面に出した講義も行なわれているが、総体として、この連続講座は、従来、季節性を題材とした内容が主であったテレビの「いけ花講座」に、それまではラジオにおける「いけ花講座」の特徴だった大型入門講座が移設されたものだったといえる。

1959年度においては、ラジオでも計18回の講座が編成されているが、これは、小原豊雲と勅使河原和風の講座を合計した数字であり、それぞれの講座数は共に9回であって、テレビにおける勅使河原霞の13回よりも少ない。入門講座としての連続回数の規模からいえば、テレビはラジオを凌駕して逆転が生じたことになる。

なぜ、こうした変化が生じたのか。その要因は、前記のようなテレビの普及拡大に伴う女性視聴者の要望に対するテレビ編成の強化に加えて、ラジオにおける聴取率の落ち込みに対する方策としてのディスクジョッキーの導入および番組のワイド化に求められる。

1960年度には、「ラジオの機能と特性を最大限に発揮してラジオ独自の分野を確立すること、――総合、ワイド番組の編成、ラジオ、テレビの効果的編成（後略）」[72]が主眼となり、「いけ花講座」の放送枠だった「女性教室」は「主婦の時間」という、より大型のワイド番組の「一こまに組み入れられた」のである。そこでは、「常にテキストを追わなければ出来ないようなテーマは避け」[73]られた。

こうした方針によって、ラジオの趣味講座はワイド番組の「一こま」となったために、大型の連続講座は編成しにくくなり、テキストを封じられたことによって入門講座も組めなくなった。1960年度にラジオにおいて「いけ花講座」が編成されていないのは、テキストが必須ともいえるラジオの「いけ花講座」がテーマとして避けられたからと考えられる。

これに対して、テレビにおいては「婦人百科」の充実強化が図られ、1960年9月以降は、「『美容体操』を別時間帯とし、30分の充実した時間を確保すること」[74]が実施された。その結果が、1960年度におけるテレビでの「いけ花講座」の放送回数26回という編成になって現れたといえる。

ところが、ワイド化の推進によってもラジオ聴取率の低下は止まらなかった。そこで、揺り戻しが生じ、1961年度には、ラジオの「女性教室」で「新しい試みとして、『いけばなと俳句』」[75]が放送された。その結果、この年度の「いけ花講座」の回数は、ラジオ20回対テレビ10回となり、再びラジオがテレビを逆転した。しかし、これは、本来「1か月間1つのテーマを通して放送」[76]する枠だった「女性教室」にいけ花と俳句という二つのテーマを編成するという変則的な編成だった。講師は池坊専永、小原豊雲、勅使河原和風と3人が交替制であたっており、1人あたりの講座回数は6乃至7回と、さらに細分化されていて、10回以上連続が通常であった往時の大型講座の面影は無い。

1963年度には再び方針が一転し、聴取率低下への方策としてのワイド化がまた押し進められた。すなわち、ラジオでの「ながら聴取態様に適合」[77]することを目的として2時間という大型のワイド番組「午後の茶の間」が新設され、「女性教室」は六つあるコーナーの最後に組み込まれたのである。こうした方針の結果、ラジオにおける「いけ花講座」は再びその居場所を失った。

ラジオからテレビへの「いけ花講座」の移行は、ラジオが「専念聴取」ではなく「ながら聴取」をするものとなっていく[78]過程において必然的に生じたものでもあった。ワイド化され、ディスクジョッキーが主流となったメディアに、「いけ花講座」のような一般向け教養としての趣味講座番組の居場所は求め得ないからである。

1964年度はラジオにおける「いけ花講座」の放送枠である「女性教室」の最終年度となった。この年度にはラジオにおいて6回「いけ花講座」が編成されているが、それは、この月の題材である「室内装飾」の一部分としてという変則的なものだった。本来は「1か月間1つのテーマ」[79]だった「女性教室」は、この時、「室内装飾」という名の元に「室内装飾」、「手作りの室内装飾品」、「住まいと家具」、「暮らしを美しく（いけ花）」という四つのコーナーを4人の講師がそれぞれ担当するという、これまでで最も細分化されたものになっていた。

一方、テレビでは、「従来『婦人百科』に含まれていた『いけばな』『お茶』などの趣味ものを、午後の別の番組として独立させ、より実用性を強く」する施策が実施され、独立した「いけ花講座」番組である「季節のいけばな」が新設された。1925年のラジオ放送開始当初から「いけ花講座」は編成されていたが、それはすべて「家庭講座」、「女性教室」、「婦人百科」など、他の題材も扱う放送枠の中においてであった。それが、1964年度についに「いけ花講座」のみを扱う放送枠が生まれるに至ったのである。

その「季節のいけばな」の内容は、「家庭婦人および一般を対象に、季節の花をつかって、各流派の家元クラスの人がいけばなのバリエーションを見せるとともに、いけばなの基本をおりこみ、とくに花と花器、飾る場所との関連に重点」[80]が置かれるというものであり、「初歩からわかりやすく指導してゆこうとする」、「初心者にもわかりやすい趣味のシリーズ番組」[81]だった。この番組では、テレビでの「いけ花講座」の特徴だった「季節性」とラジオにおけるそれの特徴だった「入門性」が共に織り込まれており、ラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの内容の分化は、この「季節のいけばな」の登場をもって、改めてテレビに統合されたことに

なる。

以上、本節では、「いけ花講座」におけるメディアごとの編成の特徴と変遷について、番組内容の観点から考察した。

その結果、ラジオからテレビへの転換期の当初においては、テレビでは映像を生かすことができる「季節性を主眼とした作品紹介」を旨とした小規模な講座が主に編成されたのに対し、ラジオでは、長期連続による入門講座が編成されたこと、したがって、戦前・戦中期のラジオにおける「いけ花講座」が併せ持っていた入門性と季節性は、ラジオとテレビとに分化したこと、そうした内容のメディアごとの特徴づけは組織的に実施されていたこと、そして、中頃からテレビにも大型入門講座が編成され、最終的に季節性と入門性を統合した内容を有する独立した放送枠がテレビに編成されることによって、分化は解消し、ラジオでの講座は終焉を迎えたこと、が明らかになった。

3.3　出演者

転換期におけるラジオおよびテレビにおいて、番組の出演者すなわち講師については、メディアごとにどのような特徴があるだろうか。

まず、ラジオの「いけ花講座」における講師ごとの講座回数を順に並べた結果を表3に示す。

表3　転換期のラジオ「いけ花講座」における講師ごとの講座回数

講師	講座回数	流派	性別
勅使河原蒼風	33	草月流	男
小原豊雲	26	小原流	男
勅使河原和風	16	和風会	男
石山文恵	10	池坊	女
池坊専永	7	池坊	男
大野典子	6	国際いけ花協会	女
勅使河原霞	2	草月流	女

続いて、テレビの「いけ花講座」における講師ごとの講座回数を順に並べた結果を表4に示す。

表4　転換期のテレビ「いけ花講座」における講師ごとの講座回数

講師	講座回数	流派	性別
勅使河原霞	34	草月流	女
勅使河原和風	29	和風会	男
安達瞳子	24	安達式	女
池田理英	22	古流松藤会[82]	女
小原豊雲	17	小原流	男
池坊専永	6	池坊	男
押川如水	5	松風流	女
佐藤秀抱	5	秀抱流	男
安達潮花	5	安達式	男
藤原幽竹	5	池坊	男
山中阿屋子	3	草月流	女
大野典子	3	国際いけ花協会	女
中山文甫	3	未生流中山文甫会	男
河村萬葉庵	2	萬葉流	男
中山尚子	2	未生流中山文甫会	女
勅使河原蒼風	2	草月流	男
大井ミノブ	2	研究者	女
小立千蓉	1	――[83]	未詳
臼井桂鳳	1	桂鳳流	未詳
工藤和彦	1	小原流	男
大槻秀楓	1	――[84]	未詳
長谷川菊洲	1	嵯峨流・未生御流	男
未生院翁甫	1	未生流	男
安達武子	1	安達式	女

1人の講師による講座の最高回数は、ラジオで33回、テレビで34回、次点は、ラジオで26回、テレビで29回と上位での回数はほぼ同様でほとんど差は認められない。

しかし、表の下位においては大きな違いがある。講座回数が1桁の者が、ラジオでは3人に対しテレビでは19人、講座回数5回以下では、ラジオ1人、テレビ18人、さらに講座回数が1回しか無い者は、ラジオ0人に対しテレビ7人と、ラジオとテレビの間で下位にいくほど大差がついている。

1回乃至2回しか出演が無い講師が多数登場していることが、転換期におけるテレビでの「いけ花講座」の特徴であり、テレビではラジオよりも講師の顔ぶれの細分化と多様化が起きていたことになる。

また、テレビでは、戦後、「日花展[85]」などのコンクールで「『彗星のごとく現れた』作家」[86]である河村萬葉庵や「日花展で賞を受賞した作家で、その後の前衛いけばな運動の中で活躍」[87]した工藤和彦、そして、「前衛いけばな運動の中で生花流派としては考えられないほどの大胆な造形作品を発表した」[88]池田理英といった作家が講師として登用されている。

1951年度にラジオで編成された「いけ花講座」は「花のこころ」とあるように、いけ花の思想が題材となって

おり、具体的な活け方を解説するものではかった。

「女性教室」は1950年度に始まっているが、1954年度に至るまで、ラジオではいけ花を題材とした本格的な入門講座は編成されていない。これは、この時期すなわち1950年前後が「前衛いけばなの全盛期」[89]であったことと関連がある。

「前衛いけ花は造型的な作品であり、決められた型があるわけではない。映像がないラジオでは、独創的な造形を伝えることが難しく、教授しにくいという事情が、この時期の『女性教室』において、いけ花が避けられた理由ではないかと考えられる」[90]のである。テレビにおいて、「前衛」作家が登用されていることは、このことを逆に裏付けているともいえよう。

一方、「一九五五年ごろにはじまる戦後の相対的安定期は、前衛いけばなを『くらしのいけばな』にまで後退」[91]させたことも、1955年１月からラジオで本格的な入門講座が編成され始めたことと呼応していよう。

テレビでの「いけ花講座」には、勅使河原霞、安達瞳子、池田理英など女性講師による講座が多い。ラジオでの１人の講師による最小講座回数は２回であるから、テレビでの末端値である１回しか講座を持たなかった者を除外して、２回以上講座を持った女性講師の総講座数を算出すると、ラジオでは18回で全体の18％であるのに対し、テレビでは87回で全体の51％[92]と過半を超える。また、２回以上講座を持った女性講師の人数では、ラジオでは７人のうち２人であるのに対し、テレビでは17人のうち７人と、ラジオよりもテレビのほうが、人数が多く割合も大きい。女性講師の数が多く割合も大きいことは、テレビにおける「いけ花講座」が持つ著しい特徴である。

1960年におこなわれた国民生活時間調査の結果を掲載した「秋季属性別生活時間数表」によれば、調査時点[93]でのテレビでの「いけ花講座」放送時間帯（放送枠は「婦人百科」）である平日午前10時30分における自宅でのテレビ視聴は、男性0.3に対して女性0.6だった[94]。また、同じくラジオでの「いけ花講座」放送時間帯（放送枠は「女性教室」[95]）である平日午前９時30分における自宅でのラジオ聴取は、男性2.1に対して女性4.6だった[96]。いずれも女性が男性に対して２倍以上の結果となっており、ラジオとテレビで男女比に大きな違いは無い。

それにも関わらず、テレビのほうが女性講師の数が多く割合も大きいのは、映像を有するというテレビの特性に呼応して出演者を起用しようとした結果であろう。

当時の「いけ花講座」の放送枠だった「女性教室」、「婦人百科」は共に放送枠としての番組名に「女性」、「婦人」が冠せられていること、また、当時の編成の記録[97]では「婦人番組」に分類されていることから、送り手の側が対象として想定した視聴者層がどちらも女性であることは明らかであるが、テレビでは講師の姿そのものが映しだされるだけに、視聴者層の親近感をより高めるために視聴者層と同性の講師が起用されたと考えられるのである。

新しい作家の登用については、戦前期のラジオ「いけ花講座」においても、流派を興して間もない勅使河原蒼風が講師として抜擢された事例があった。蒼風は後に「これが私が世に紹介される端緒であった。」[98]と回想している。

この勅使河原蒼風を始めとして、戦前のラジオにおいて登用された講師の多くは、「自由花、盛花などの近代流派を代表する花道家たち」[99]で、放送は彼らが世に出るきっかけとなったばかりでなく、「放送に出演した花道家たちにとっては、流派のいけばなと家元の存在を大衆にアッピールする機会」[100]ともなったのである。戦前のラジオにおける「いけ花講座」が、草月流を始め、特に都市での新しい生活様式に適合した新興流派の発展に大きく寄与したことは、放送メディアによる文化伝播のめざましい例として特筆すべき事象だった[101]。

では、ラジオからテレビへの転換期における流派は、どのような顔ぶれになっていただろうか。

ラジオでの「いけ花講座」における流派について、講座回数とその占有率は図３のとおりである。

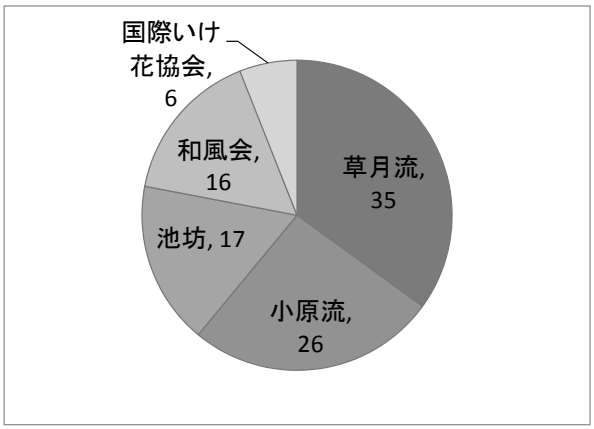


図３　転換期におけるラジオ「いけ花講座」の流派と占有率

続いて、テレビでの「いけ花講座」における流派について、講座回数とその占有率は図４のとおりである。

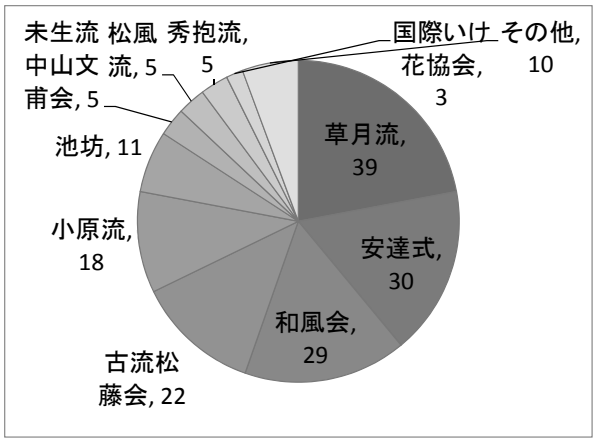


図４　転換期におけるテレビ「いけ花講座」の流派と占有率

ラジオでは、流派は五つしかない。一方、テレビでは流派は講師同様に細分化・多様化している。とはいえ、２桁以上の占有率を持つ上位流派の顔ぶれは、ラジオでは、草月流、小原流、池坊、和風会であり、テレビではこれに安達式と古流松藤会が加わるのみで、ほとんど変わっていない。このうち、草月流、小原流、池坊は、いわゆる「三大流派」として戦前から続く大流派であり、それがラジオからテレビへと転換しても、なお同様の占有率を得ているということは、戦前期に最大の占有率を得ていたのが新興流派である草月流だったことと比較すると大きな違いである。また、安達式、古流松藤会はラジオでは占有率が高くなかったが、いずれもテレビが登場する前から著名な流派だったことには変わりは無い。ラジオが新しいメディアとして登場した時には、そのメディアとしての力が新興流派の発展に寄与したが、テレビという新しいメディアにおいては、既存の流派の占有率は変わらず、新興勢力が既存勢力を覆すまでには至らなかったことになる。

また、テレビにおいて三大流派がいずれも２桁以上の占有率を得ているということは、当時500万とも1000万ともいわれた[102]「いけばな人口」を、新しいメディアであるテレビが取り込もうとした結果であるとも考えられる。戦前のラジオが新興いけ花の普及に寄与したのとは逆に、戦後のテレビは既存いけ花を新メディアの普及に利用しようとしたことになる。それは、テレビ放送初期の1954年度に実施されたアンケート調査で、「『ホーム・ライブラリー』の放送内容として、どんな種目を希望しますか。」という質問の選択肢に「生花」が挙げられていたこと[103]からも裏付けられる。

ラジオからテレビへの転換期において、ラジオ、テレビ共に、占有率順位の１位に位置しているのは、草月流である。草月流が占有率順位の１位であることは、戦前から戦後にかけてのラジオにおいて一貫しており、放送における「いけ花講座」の主役を常に勤めてきた草月流こそは、放送メディアの申し子といえるだろう。

ところが、同じ草月流ではあるが、その講師は、ラジオとテレビとで完全に入れ替わっている。すなわち、ラジオでは、勅使河原蒼風（1900－1979）が33回で最上位に位置しているのに対し、テレビでは蒼風の娘である勅使河原霞（1932－1980）が34回で同じく最上位に位置しているのである。勅使河原蒼風はテレビでは２回、霞はラジオでは２回と、二つのメディアにおける出演の度合いはほぼ対称になっている。

同様の現象は、草月流とは異なる形ではあるが、安達式でも生じている。安達式は、この時期のラジオにおいては講座が無いが、それ以前の戦前から戦後にかけてのラジオでは、計５回「いけ花講座」を担当しており、講師はいずれの場合も安達潮花（1887－1969）だった。ところが、テレビでは、潮花の娘の安達瞳子（1936－2006）が24回で３位に位置しているのに対し、潮花は５回にしかすぎない。ここでも、父と娘の逆転が生じていることになる。

初めてテレビでの「いけ花講座」を担当した時、勅使河原霞は21才[104]、安達瞳子は19才[105]だった。共に、実力はあるとはいえ、その流派の家元である父が存命であり、まだ流派を継いでいないのに若くして起用されたのは抜擢といえるだろう。

２人は、「いけ花講座」だけでなく、当時開発中だったカラーテレビの実験放送にも複数回出演（勅使河原霞は、1958年９月11日および1959年８月24日、安達瞳子は、1959年５月28日および1959年10月20日）しており、いわゆる「テレビ写り」が評価されていたと思われる。

テレビでの「いけ花講座」への出演を重ねた後、勅使河原霞は1961年の「紅白歌合戦」に、安達瞳子は1965年の「紅白歌合戦」に、それぞれ審査員として出演[106]しており、国民的人気を集める存在となっていたことがうかがえる。

勅使河原霞が初めてテレビの「いけ花講座」に出演してから10年ほど後の1963年11月、雑誌『女性自身』が「世論調査／美しい人」と題しておこなった、読者による投票の結果を掲載[107]した。勅使河原霞は、投票総数16614票のこの投票で814票を獲得し８位となったが、10位までの他の顔ぶれは、美智子妃を除き、新珠三千代、山本富士子、高峰秀子などすべて女優で占められていた。勅使河原霞は、女優と伍する存在となっていたのである。また、安達瞳子も後にクイズ番組の回答者として定期的に出演する[108]など、華道家にとどまらない活躍をみせ

るようになる。２人はテレビ出演において、従来の華道家の枠を超えた人気を有することとなったのである。

テレビに映像があるということは、単に造形芸術である作品としてのいけ花が映像をもって伝えられるようになっただけでなかった。テレビには映像があるために、作品だけでなくその作者も映しだされることになり、作者にも映像メディアであるテレビに適した条件が自ずと求められるようになった。

テレビという新しいメディアが登場した時に、新しい出演者が登用されたが、それは新しいメディアの特性に即した出演者であったことを、テレビ「いけ花講座」における、「前衛」作家の登用、女性華道家のラジオに比した数の多さと割合の大きさ、そして、勅使河原霞と安達瞳子の抜擢といった事項が、明らかにしているといえる。

以上、本節では、「いけ花講座」におけるメディアごとの特徴について、出演者という観点から考察した。

その結果、ラジオに比べてテレビでは、出演者の顔ぶれ・流派ともに細分化・多様化しており、講師には新人が登用された上、女性の出演が著しく多いという特徴があることが明らかになった。

3.4　テキスト

ラジオからテレビへの転換期において、テキストについては、どのようなメディアごとの特徴があるだろうか。

図５は、ラジオからテレビへの転換期における講座番組について、テキスト発行の有無を年度別に示したものである。（図中、薄墨は番組の放送がある年度、黒線はテキストが発行された年度、黒丸はテキストの発行開始および終了時点を表す。また矢印はその年度以降もテキストが発刊されていることを示す。）

期間中、ラジオでは一貫してテキストが発刊されているのに対して、テレビにおけるテキストの発刊は間歇的であり、1960年度と1964年度（およびそれ以降）しか無い。

もともと、ラジオの講座番組において、テキストは映像が無いというラジオの欠陥を補うものとして重視され、特に、造形芸術ないし造形技術であるいけ花をラジオで講義するにあたっては、重要な役割を果たしてきた。1925年12月に初めてラジオでいけ花講座が放送された際、既にテキストが発刊されていたのを始め、1929年に勅使河原蒼風が発刊したテキストには、豊富な図案と写真が掲載され、このテキストは本格的な指導書として「後に草月流花型法として完成されるものの出発であり、基礎」[109]ともなっている。また、戦後復興期に本格的な趣味講座番組として登場した「女性教室」において、1955年に、勅使河原蒼風による「暮しを豊かにするいけ花」が発刊され、その放送は「平易な話術と美麗懇切なテキストと相俟って、これまでにない聴取率を記録」[110]するなど、テキストはラジオ番組に大きな貢献をする存在になっていた。

一方、テレビにおいては、テレビ放送開始と共に始まった「ホーム・ライブラリー」では、いけ花がその主要なコンテンツとして重視されていたにも関わらず、テキストは発刊されていない。これは、映像を伴うテレビにおいては、あえてテキストを発刊する必要が無いと考えられたためだろう。

1960年度のテレビ「婦人百科」においては、一時的にテキストが発刊されたが、その期間は１年間という短いものだった。テキストを発刊する必要はないはずのテレビ「婦人百科」において、敢えてテキストが発刊されたのは、テレビにおける講座番組のてこ入れのためと思われる。研究の背景で述べたとおり、テレビの普及率は当初低迷し、1959年度以降に急上昇する。テキスト発刊には相応の準備期間を要することから、1960年度に発刊するための準備は1959年度以前に始められていたと想定される。その時点ではまだ、1959年度のテレビの普及率は明らかになっていない。したがって、テレビはいまだ普及率１桁の黎明期にあるとみなされ、てこ入れのため

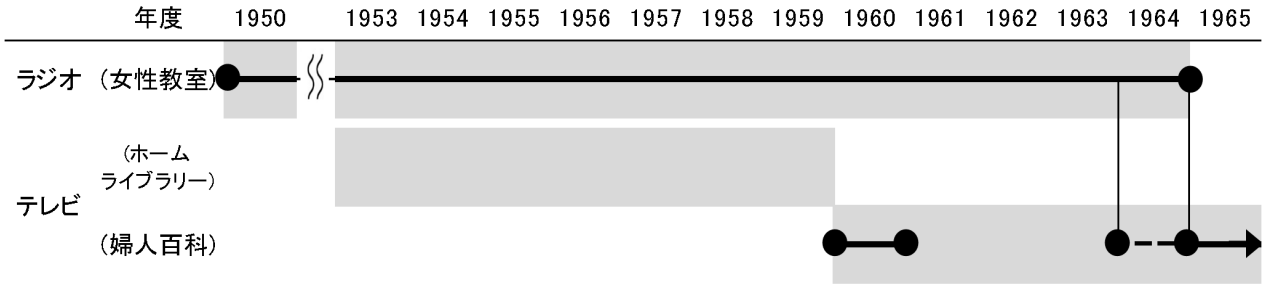


図５　ラジオからテレビへの転換期における講座番組のテキスト発行年度

にテキストを発刊したのであろう。

これに先立つ1956年度においては、「ホーム・ライブラリー」の内容の一部をラジオの「女性教室」と同じテーマにして放送することをおこない、「女性教室」の「テキストによって、放送だけでは、メモをとりきれないときや、放送の内容のもっと広い応用など、相互の長所を生かして、視聴者からよろこばれた。」[111]ということがあった。当初、テレビならば映像があるからテキストは不要と想定していたのが、案に相違して、テレビでもテキストが有用であることが徐々に明らかになってきたのである。

この「婦人百科」におけるテキストの発刊は、1960年度のみで打ち切られてしまう。理由はこの頃からあらわになったテレビの急速な普及とそれに相反したラジオの凋落であろう。前年度（1959年度）のテレビの伸びが明らかになる一方、ラジオの聴取率低下は止まらない。その最中にテレビとラジオとで共にテキストが発刊されていては、テレビの優位性だけが際立ち、ラジオの講座番組は存在意義を失う。そこで、テキストはラジオだけのものとして、差別化を図ったと考えられる。

ところが、こうした差別化にも関わらず、ラジオの凋落は続いた。さらに、この差別化はテレビの視聴者にとっても不便なものだった。逐次参照性を欠いたテレビにおいては、特に講座番組にとってテキストは有用なものだったからである。

結局、テレビでのテキスト発刊は「視聴者の希望が多いため、39年度からラジオ『女性教室』のテキストに付録のような形で」[112]再開される[113]。図５に点線で示した部分がそれである。この年度には、一つのテキストにラジオとテレビの二つの番組が共生するという、放送番組のテキストとしては変則的な発刊形態[114]が出現することになった。一旦は差別化を図ったものの、結局、視聴者の要望に押され、ラジオの領域の一部がテレビに移管されたことになる。

こうした変則的な措置も、しかし、１年しか続かず、翌1965年度にはテレビ「婦人百科」のテキストが独立して発刊されることになる。いけ花は、その一部に「趣味のコーナー」として毎号掲載されることになった。と同時に、ラジオ「女性百科」は放送が打ち切られ、15年に渡る歴史の幕を閉じた。もはやラジオの凋落は覆いがたいものとなり、テレビの普及率も８割に迫った結果、これ以上、趣味講座番組においてラジオとテレビの差別化を図る意義が見出せなくなったのであろう。ラジオの趣味講座番組にとって欠かせないものだったテキストがテレビに移管されたことは、ラジオにおける趣味講座番組の存在意義が無いものとされたに等しい。この年度より後、ラジオにおいて定時の趣味講座番組放送枠は編成されることはなく、ラジオ第一放送の編成は、ますますワイド化による「ながら聴取」に重点を置くものになっていく。

以上、本節では、「いけ花講座」におけるメディアごとの特徴について、テキストの観点から考察した。

その結果、当初、テレビにはテキストは不要と思われていたが、その有用性が明らかになった結果、一時的にテレビでもテキストが発刊されたこと、その後、ラジオの凋落に対応するため、テレビではテキストの発刊を中止するという差別化が図られたこと、そして、結局、ラジオの凋落を止めることはできず、テレビでのテキスト発刊再開に至ると共に、ラジオでの女性向け趣味講座番組は意義を失い廃止されたことが明らかになった。

４．おわりに

本研究では、1950年４月３日から1965年４月３日までの番組確定表を調査し、「いけ花講座」を事例として、ラジオからテレビへの転換期におけるメディアごとの編成の特徴と変遷について四つの観点から考察した。

その結果を以下に示す。

（１）放送時間帯は、ラジオの「いけ花講座」とテレビの「いけ花講座」に関して、家庭にいる女性という同じ視聴者層を対象としながらも、棲み分けが図られていた。

（２）番組の内容は、転換期の当初においては、テレビでは、映像を生かすことができる「季節性」を主眼とした作品紹介が単発の講座で編成され、一方ラジオでは、長期連続の入門講座が編成された。その後、徐々にテレビにも大規模な入門講座が編成され、最終的に季節性と入門性を兼ね備えた独立した放送枠がテレビに編成されることによって、ラジオでの講座は終焉を迎えた。

（３）出演者は、ラジオに比べてテレビでは、出演者の顔ぶれ・流派ともに細分化・多様化しており、講師には新人が登用される傾向があった、特にテレビではその特性に応じた女性講師の出演が著しく多く、ラジオとの相違が転換期を通じて生じていた。

（４）テキストは、当初、テレビには不要と思われていたが、その有用性が明らかになった結果、一時はテレビでもテキストを発刊した。しかし、ラジオの凋落が深刻化すると、テレビではテキストの発刊を中止するという差別化が図られた。結局、ラジオの凋落を止めることはできず、テレビでのテキストは再び、発刊されるに至っ

た。そして、それと共に、ラジオの「いけ花講座」は意義を失い、廃止された。

これら四つの結果を合わせて考察すれば、転換期における「いけ花講座」というコンテンツでは、放送時間帯はラジオとテレビとで棲み分けが図られた上で、内容、出演者、テキストについて、次のような編成の特徴と変遷が生じたといえる。

まず内容においては、戦前・戦中期のラジオにおける「いけ花講座」が有していた入門性と季節性のうち、入門性はラジオに残し、季節性をテレビに移管するというかたちで分化した後、徐々に入門性もテレビに移管され、最終的にテレビにおいて入門性と季節性とが統合された。次に出演者については、映像を有するというテレビの特性に応じた新たな出演者が現れた。最後にテキストについては、映像が無いというラジオの特性を補うために、可能な限りラジオに残すという差別化が図られた。

こうした現象は、メディアの転換期において、古いメディアのコンテンツを守ろうとする姿勢と新しいメディアへコンテンツを供給しなければならないという要求との、いわばせめぎ合いによって生じたものともいえるだろう。

テレビという新しいメディアが登場した時、「いけ花講座」では、コンテンツの題材を共有した上で、ラジオとテレビそれぞれのメディアの特性に応じた形態のコンテンツが出現した後、古いメディアのコンテンツは新しいメディアに取り込まれて、メディアの転換が完了した。その過程で試行錯誤があったにしても、メディアの転換が、結果的にコンテンツのバリエーションを増やし、新しいタイプの出演者を登場させたといえる。

これらのことは、放送メディアの歴史において特筆すべきことであると同時に、テレビからインターネットへと新たなメディアの転換が生じつつある今日においても示唆に富む知見であると思われる。

テレビにコンテンツを移管した後のラジオは、「ながら聴取」に適したコンテンツすなわちワイド化したトーク番組やディスクジョッキーに最後のよりどころを得て、以後、試験勉強、車の運転、行楽など、他のことをしながら聞くメディアになっていく[115]。

一方、テレビもまた、結局はテキストを必要としたところにメディアとしての限界をかいま見させていた。一過性で単方向のメディアであるテレビは、反復学習と質疑応答ができないという欠点を持っており、この欠点を補うメディアの出現は、インターネットという双方向のメディアにおけるインタラクティブなコンテンツの登場まで待たなければならない。

ラジオにおける女性向け一般教養番組の看板として長い伝統を誇った「女性教室」が、番組上でのセレモニーもなくひっそりと[116]終了した翌週、新たに1965年度編成による放送が始まった。そこで、「季節のいけばな」は廃止され、テレビの「いけ花講座」はワイドショーの一こまに組み込まれることになった。それはテレビにおける熾烈な競争に基づく編成の試行錯誤を反映したものだった。長く公共放送の独占が続いたラジオとは異なり、テレビにおいては、当初から複数のキー局が鎬を削る状況となったからである。

激しい競争を繰り返しながら、テレビはその全盛期を迎える。「いけ花講座」もまた、1960年代から70年代にかけて、総数で750本にも及ぶ[117]夥しい数の番組が放送され、勅使河原霞や安達瞳子が「スター」として「いけ花講座」以外のトーク番組やクイズ番組にも出演するという、黄金期が訪れる。

受け手の嗜好の変化に対応した送り手の側の編成の変化についての詳細な照合、「いけ花講座」以外の番組についての転換期におけるメディアごとの特徴、および、テレビ全盛期における「いけ花講座」の研究は、今後の課題としたい。

注

1）NHK放送文化研究所・世論調査部「日本人とテレビ　2015調査 結果の概要について」NHK放送文化研究所，2015，p.1

2）木村義子･関根智江･行木麻衣「テレビ視聴とメディア利用の現在～日本人とテレビ・2015調査から～」『放送研究と調査　2015年8月号』NHK放送文化研究所，2015，pp.31-32

3）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　3分冊の3」『放送学研究10』日本放送出版協会，1965，p.230

4）日本放送協会編『NHK年鑑1959』日本放送出版協会，1958，p.44

5）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　3分冊の1」『放送学研究8』日本放送出版協会，1965，p.9

6）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　3分冊の3」『放送学研究10』日本放送出版協会，1965，p.230

7）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　3分冊の1」『放送学研究8』

日本放送出版協会，1965，p.9
8）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の１」『放送学研究８』日本放送出版協会，1965，p.9
9）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の３」『放送学研究10』日本放送出版協会，1965，p.232の第6-56図「テレビ普及率とラジオ聴取率の相関」を元に作成。
10）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の３」『放送学研究10』日本放送出版協会，1965，p.233
11）古田尚輝「テレビジョン放送における『映画』の変遷」『成城文藝196号』成城大学，2006，pp.25-36
12）川野文也編『テレビラジオ年鑑　―1954年版―』テレビラジオ新聞社，1953，p.111
13）神山順一･藤岡英雄･岩崎三郎「講座番組研究Ⅰ　講座番組はどれだけ利用されているか　―横浜調査の結果から―」『文研月報　昭和49年１月号』NHK放送文化研究所，1974，p.9
14）日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会，1962
15）NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間』日本放送出版協会，1963，p.135
16）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の３」『放送学研究10』日本放送出版協会，1965，p.233
17）日本放送協会放送世論研究所編『昭和40年度国民生活時間調査』日本放送出版協会，1966
18）日本放送協会放送世論研究所『テレビと生活時間』日本放送出版協会，1967，p.29
19）藤原功達「家庭婦人はテレビ・ラジオをどのようにみききしているか」『文研月報　昭和40年12月号』日本放送出版協会，1965，p.14
20）水尾比呂志『いけばな　花の伝統と文化』美術出版社，1966，p.139
21）辻泰明「初期ラジオ放送における，いけ花講座番組　―メディアが文化の伝播に果した役割―」『いけ花文化研究　第二号』銀河書籍，2014，pp49-52
22）工藤昌伸『日本いけばな文化史　三　近代いけばなの確立』同朋舎出版，1993，p.105
23）辻泰明「初期ラジオ放送における，いけ花講座番組　―メディアが文化の伝播に果した役割―」『いけ花文化研究　第二号』銀河書籍，2014，pp.59-63
24）辻泰明「初期ラジオ放送における，いけ花講座番組　―メディアが文化の伝播に果した役割―」『いけ花文化研究　第二号』銀河書籍，2014，p.52および「昭和戦中・戦後期ラジオ放送における『いけ花講座』の研究」『いけ花文化研究　第三号』銀河書籍，2015，pp.23-25
25）辻泰明「昭和戦中・戦後期ラジオ放送における『いけ花講座』の研究」『いけ花文化研究　第三号』銀河書籍，2015
26）日本放送協会放送史編修室編『日本放送史　下巻』日本放送出版協会，1965，p.478
27）久保田滋，瀬川健一郎『日本花道史』光風社書店，1971，p.87
28）『中央公論』1953年６月号，p.251
29）『週刊朝日』1966年12月23日号，p.16
30）『朝日ジャーナル』1962年６月10日号，p.51
31）工藤昌伸「現代いけばなとインテリア」河北倫明編『図説　いけばな大系 第４巻　現代のいけばな』角川書店，1971，p.154
32）同上。
33）日本放送協会編『NHK年鑑1959』日本放送出版協会，1958，p.91
34）日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.4
35）堀明子「ラジオ嗜好とテレビ嗜好」日本放送協会放送文化研究所編『昭和38年版　NHK放送文化研究所年報　－第８集－』日本放送協会，1963，p.70
36）同上。p.72
37）同上。p.73
38）『NHK番組確定表』とは、放送することが確定した番組の番組（放送枠）名、副題、出演者などを放送時刻順に記した表である。可能な限り変更も追記され、製本されて保存されている。
39）日本放送協会放送文化研究所「特集・日本におけるテレビ普及の特質　３分冊の１」『放送学研究８』日本放送出版協会，1965，p.69
40）「主婦の時間」（午前９時５分－9時59分）の１コーナー。
41）確定表上の表記は「勅使河原　かすみ」。
42）毎週木曜。
43）確定表には11月12日は勅使河原霞の記載のみ。
44）毎週木曜。
45）毎週木曜。
46）毎週火曜。
47）12月29日のみ「―お正月をいける―」の副題あり。
48）安達瞳子の単独出演による講座はこの時が初。
49）毎週火曜。

50）毎週火曜。
51）1月16日は「―環境をいかすいけ花―」，同30日は「―アイデアをいける―」の副題あり。
52）毎週月曜。
53）4月23日「―花のもたせ方―」、同30日「―花菖蒲のいけ方―」、5月7日「―投げ入れ花のいけ方―」、同14日「―花材のくみあわせ―」、同21日「―変型花器―」、6月4日「―複体のいけ方―」、同11日「―四方正面花―」、同18日「―書画といけばな―」、同25日「―質問に答えて―」の副題あり。
54）毎週月曜。
55）毎週月曜。
56）中山尚子は3月4日・11日のみに記載あり，18日・25日は中山文甫のみ。
57）毎週火曜。再放送午後3時－3時30分。
58）括弧内は再放送回数、12月10日（第6回）と12月31日（第9回）は再放送なし。
59）毎週月曜。
60）毎週月曜、8月10日、同17日は休止。
61）宮坂花恵は7月27日まで、8月3日より9月7日までは小林智恵子、9月14日より28日までは皆川信子、他に9月21日に戸板康二がゲスト出演。
62）性別を付したのは主となる講師のみでゲスト出演者については対象としない。
63）毎週月曜、10月12日、同19日、11月9日、同23日は休止。
64）池田昌弘は10月5日、11月2日に出演、他に高田敏子（詩人）が10月26日、柳宗理（工業デザイナー）が11月30日、長岡輝子（女優）が12月21日に、それぞれゲスト出演。その他の日は池田理英のみの出演。
65）性別を付すのは主となる講師のみでゲスト出演者については対象としない。
66）毎週月曜，1月25日，2月1日は休止。
67）沼田真『生態学方法論』古今書院，1979，p312
68）1961年度の池坊専永による「いけばなと俳句」も各回の副題は「いけばなの歴史（1）（2）」「暮しのいけばな」などとなっており、本格的ないけ花入門講座となっている。この時の番組シリーズ全体の副題が「いけばなと俳句」となっているのは、この月の下旬に中村汀女による俳句の講座が設定されていたためで、「いけばなと俳句」はこの月に二つの題材があったことを示すものにすぎない。
69）日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会，1960，p.113
70）日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会，1960，p.178
71）日本放送協会編『NHK年鑑1961』日本放送出版協会，1960，p.178
72）日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会，1961，pp.54-55
73）日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会，1961，p.100
74）日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会，1961，p.195
75）日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.42
76）日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.42
77）日本放送協会編『NHK年鑑'64』日本放送出版協会，1964，p.75
78）日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』には、「最近の傾向として、ラジオの聴取好適時間帯は、夜間から朝の6～7時台に移行し、同時に聴取態度では“重なり行動を伴なう聴取”、すなわち、何かほかの仕事をしながら聞くといった態度が顕著にみられる。」という記述がある。（日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.4）
79）日本放送協会編『NHK年鑑1962No.2』日本放送出版協会，1962，p.42
80）日本放送協会編『NHK年鑑'65』日本放送出版協会，1965，p.150
81）「新番組ライン・アップ」『放送文化　1964年4月号』，日本放送出版協会，1964，p.66
82）番組確定表では，古流と表記されている。
83）小立千蓉は、番組確定表に肩書の記載が無く、出演時の流派は不明である。
84）大槻秀楓は、番組確定表に肩書の記載が無く、出演時の流派は不明である。
85）正式な名称は日本花道展。
86）工藤昌伸『日本いけばな文化史　四　前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版，1994，p.51
87）工藤昌伸『日本いけばな文化史　四　前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版，1994，p.53
88）工藤昌伸『日本いけばな文化史　四　前衛いけばなと戦後文化』同朋舎出版，1994，p.102
89）重森弘淹「現代いけばなの歩み（戦後）河北倫明編『図説　いけばな大系 第4巻　現代のいけばな』角川書店，1971，p115
90）辻泰明「昭和戦中・戦後期ラジオ放送における『い

け花講座』の研究」『いけ花文化研究　第三号』銀河書籍，2015，p.33

91）重森弘淹「現代いけばなの歩み（戦後）河北倫明編『図説　いけばな大系 第４巻　現代のいけばな』角川書店，1971，p118

92）２回以上講座を担当した者の講座数合計169回で除した。

93）調査がおこなわれたのは、1960年10月である。

94）日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会，1962，p.37およびp.43

95）「主婦の時間」の１コーナーに組み込まれてはいたが，「女性教室」としての放送時間帯は９時30分－９時45分とされていた。

96）日本放送協会放送文化研究所編『国民生活時間調査』日本放送出版協会，1962，p.37およびp.43

97）日本放送協会編『NHK年鑑1962』日本放送出版協会，1961ほか各年度の年鑑を参照。

98）『私の履歴書　文化人６　勅使河原蒼風』日本経済新聞社，1983，pp.300-301

99）工藤昌伸『日本いけばな文化史　三　近代いけばなの確立』同朋舎出版，1993，p.105

100）工藤昌伸『日本いけばな文化史　三　近代いけばなの確立』同朋舎出版，1993，p.105

101）辻泰明「初期ラジオ放送における，いけ花講座番組　―メディアが文化の伝播に果した役割―」『いけ花文化研究　第二号』銀河書籍，2014，pp.47-73

102）雑誌『朝日ジャーナル』1962年６月10日号、p.51には、「いわゆる前衛いけばなの人口は五百万といわれ、押しも押されもせぬ一つの文化現象として、広く社会に浸透している」という記述がある。また、少し後の時期の資料ではあるが、雑誌『週刊朝日』1966年12月23日号、p.16には「華道の流派、なんと三千流。いけばなをたしなむ“華道人口”一千万人という未曾有のいけばなブーム」という記述がある。

103）日本放送協会編『NHK年鑑1956』日本放送出版協会，1955，p.341

104）勅使河原霞は、1932年10月20日生まれ。テレビ「いけ花講座」への初出演は1954年３月２日である。

105）安達瞳子は1936年６月22日生まれ。テレビ「いけ花講座」への初出演は1956年３月１日である。

106）「紅白歌合戦」出演までの期間における２人のテレビでの「いけ花講座」出演回数は、勅使河原霞が23回、安達瞳子が25回である。

107）雑誌『女性自身』1963年11月18日号 pp.46-49

108）安達瞳子は1970年代にクイズ番組「連想ゲーム」の回答者を勤めた。

109）草月出版編集部編・著『草月1927-1980創造の森』草月出版，1981，p.30

110）日本放送協会編『NHK年鑑1956』日本放送出版協会，1955，p.87

111）日本放送協会編『NHK年鑑1958』日本放送出版協会，1957，p.220

112）日本放送協会編『NHK年鑑 '65』日本放送出版協会，1965，p.149

113）ただし、「いけ花講座」はこの年度には「季節のいけばな」として独立して編成されていたため、テキストには収録されていない。

114）放送番組のテキストは通常、一つの番組（放送枠）ごとに発刊される。たとえば同じ英語講座でもラジオとテレビではテキストは別である。

115）1965年の国民生活時間調査では、「ラジオをきいている時間の八〇％以上がながら聴取の時間」だった。日本放送協会放送世論研究所『テレビと生活時間』日本放送出版協会，1967，p.30

116）「女性教室」と同じく長い伝統をもった女性向け番組である「主婦日記」が前年度に終了した時には、特集が組まれたのに対して、「女性教室」の終了時には、そうした形跡は無い。

117）再放送を含む。

（平成28年３月30日受付）
（平成28年７月15日採録）